

東京多摩西部地区の高齢者の生活に関する総合的研究（第1報）生活行動

都立立川短大 ○大竹美登利、齊藤浩子、石川尚子、大久保みたま、

大関政康、唐沢恵子、川端博子、高崎禎子、武田紀久子、林隆子

目的 わが国における高齢化の進展はめざましく、本格的な高齢社会を迎える21世紀へむけて、この問題への取り組みが様々な分野で行われている。特に大都市東京における急激な高齢社会到来は、新たな生活上の諸問題への対策の緊急性を示唆している。都市化の波の中で、高齢者がどのように地域での生活を維持しているのかは関心がもたれるところであり、われわれは生活科学の立場から在宅高齢者の総合的な生活実態調査を行うこととした。

方法 調査地域としては、伝統的な生活文化を残しつつも、都市化が緩慢に進み、かつ高齢人口比率が高い東京都青梅市に注目した。対象者は、研究の第1段階として、70歳以上の在宅老人に限定し、青梅市の老人クラブ連合会を通じて、70歳以上人口の1割に当たる約700人とした。1989年5～8月に、各老人クラブ毎に日常の活動の拠点である地域会館において面接調査を実施した。調査はフェイスシート、生活時間と余暇、人間関係のネットワーク、衣生活、食生活をめぐる問題にわたる。本報告では生活時間と余暇、人間関係のネットワークを中心に述べる。

結果 集計数は708名、男345人（48.7%）、女363人（51.3%）、既婚の子と同・隣居者は66.5%であった。1日の過ごし方では農業労働も含めた収入に結びつく仕事と家事労働の従事に性差が見られる。余暇については、老人クラブを通じて幅広く活動している人が多い。最も交流頻度の高い付き合いは近所の人とであり、毎日話をしたり、週2～3回家でお茶を飲んだりしている。次いで親しい友人である。別居の子どもとは電話による交流が多い。